

## 中学校体育授業における伝統文化の継承・創造を意図した実践的研究

—民謡“こきりこ節”を題材にして—

山崎 正枝<sup>1)</sup> 廣瀬 尋理<sup>2)</sup> 横山 剛士<sup>3)</sup>**Practical Investigation on Intention of Inheritance and Creation about  
Traditional Culture on P. E. Classroom in Junior High School  
: Choose the Matter of Folk Song “KOKIRIKO BUSHI”**Masae YAMAZAKI<sup>1)</sup> Masatoshi HIROSE<sup>2)</sup> Takeshi YOKOYAMA<sup>3)</sup>**Abstract**

The research theme of this junior high school is “development of a curriculum that crosses subjects such as traditional culture education”. The purpose of this research is to conduct a unit intended to inherit and create traditional culture in the dance field of physical education classes, and to examine what kind of influence the students had. Classes were held from October to December, and the oldest folk song in Japan, “KOKIRIKO BUSHI”, was targeted for 76 students in 4 classes in the first grade. The emphasis was the development of creative activities that promoted interest in dance and evolved it, valuing the fact that the tradition has been handed down and that the movement of the dance has meaning. Questionnaires were surveyed at the beginning and end of the unit. At the result, 31 out of 76 students (40.8%) to 61 students (80.3%) answered that they liked dancing. At the result, the data showed that the answer that they liked dancing had increased from 31 out of 76 students (40.8%) to 61 students (80.3%). With regard to handing down awareness, the responses were obtained from 62 (81.6%) to 70 (92.1%). The fact that independent and interactive learning was practiced by tackling unit dance showed a clear need for dance education. The verbalization of the reflections by asking questions helped us to understand the actual situation and direction.

**Key words : “KOKIRIKO BUSHI”, Traditional Dance, Creative Activity, Questionnaire**

1) 金沢大学 人間社会学域 学校教育学類 非常勤講師

2) 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属中学校

3) 金沢大学人間社会研究域

1) *School of Teacher Education, College of Human and School Sciences, Kanazawa University*2) *Affiliated junior High School, the School of Teacher Education, College of Human and Social Science, Kanazawa University*3) *Institute of Human and Social Sciences, Kanazawa University*

連絡先 山崎正枝

E-mail : ma-yamazaki@staff.kanazawa-u.ac.jp

## I. 目的および問題の所在

本研究の目的は、中学校体育授業において、伝統文化の継承・創造を意図した単元を計画、実施し、生徒にどのような影響を及ぼしたのかを検証することである。本研究では、「ダンス」領域フォークダンスにおいて、富山県南砺市五箇山地域に残っている民謡“こきりこ節”<sup>9)</sup>を取り上げ、その単元・実践化の過程を描き、実践の効果をダンスに対する生徒の意識の変化から分析した。

本研究の直接的きっかけは、金沢大学人間社会学域学校教育学類附属中学校（以下、附属中）が、平成29年度より2年間、伝統文化教育をテーマにした研究指定を国立教育政策研究所から受けたことである<sup>9)</sup>。そこでは、それ以前の学校研究で取り組んだ「ESD（Education for Sustainable Development）研究で実施した教科横断的なカリキュラム開発（平成26～28年度）<sup>3,4,5)</sup>をベースにおきつつ、「伝統文化」を各カリキュラムに組み込むことが企図された。平成30年度<sup>6,7)</sup>の附属中の学校研究テーマは「伝統文化教育を中心とした教科等横断的なカリキュラムを開発－グローバル社会に生きるために必要な資質・能力の育成を目指して－」となっている。後述するように、本研究は、伝統文化教育と教科横断カリキュラムというカリキュラム開発をめぐる2つのテーマが重なり合った実践といえる。従って、本研究はこうした附属中の学校研究の延長線上に位置するものである。とはいえ、本研究は、学校研究<sup>9)</sup>とは、異なった観点から分析を行い、実践の成果と課題を示している。実践にあたっては、廣瀬が保健体育科の単元を伝統文化教育観点から構想した際、「ダンス（フォークダンス）」で具体化していくことを発想し、横山と山崎が助言するかたちで進めてきた。

さて、本研究が取り上げるのは、「ダンス」フォークダンスの民謡“こきりこ節”である。本研究がこれに着目したのは、次の理由からである。第一に、地域性のある伝統文化であると考えたからである。「ダンス」領域のフォークダンスについて、新学習指導要領<sup>9,10)</sup>では「伝承されてきた日本の民謡や外国の踊りがあり、それぞれの踊りの特徴

を捉え、音楽に合わせてみんなで踊って交流して楽しむことができるようにすることが大切」とされ、「日本の民謡では、地域に伝承されてきた民謡や代表的な日本の民謡を取り上げ、その特徴を捉える」とある。“こきりこ節”は、日本最古の民謡ともいわれ、その歴史性、地域性が本実践と合致すると考えた。第二に、生徒がダンスに主体的にかかわれるよう創作する局面を創れると考えたからである。後述するように、本実践は、単元の前半で“こきりこ節”の意味や型となる踊り方を学習した後、単元の後半で、前半での学びを基礎に生徒自身に創作する局面を計画、実践した。

単元化にあたっては、こきりこ節の背景や踊りの特徴を調べ、伝統文化として残すべき踊りの要素はどこなのか、継承するために生徒の創造性を活かし創作させられる局面はどこなのかについて議論、検討した。創作させて表現する局面を創ることで、現在、残っている民謡を受容的に踊るのではなく、ダンスに対して主体的にかかわる力を育成することに繋がると考えた。

以上を踏まえ、本研究の具体的研究課題として次に取り組む。まず、研究対象および単元内容等について整理を行う（Ⅱ）。実践した成果がどのように現れたのかを生徒の意識より明らかにし（Ⅲ）、本実践の成果と課題について考察する（Ⅳ、Ⅴ）。本稿は、横山がⅠ、山崎がⅡの1と4、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、廣瀬がⅡの2、3を執筆した。

## Ⅱ. 実践内容

### 1. 対象者

対象者は、附属中学校1学年4クラスの男子78名（1組19名、2組の20名、3組19名、4組20名）、会場は体育館で実施された。実施日は2018年10月26日、11月2日、9日、16日、23日（授業研究発表会）、30日、12月7日である。尚、アンケート調査について回答を得られた76名について検討する。体育授業では男女が分けられている。

### 2. 内容

単元の目標は、ダンスを通じてダンスの特性や

踊りの由来を理解すること、みんなで踊る楽しさを味わうこと、ダンスに積極的に取り組むとともに、互いの良さを認め合おうとすることである。その目標に近づけるための横断的なカリキュラムの実践<sup>7)</sup>として、1学年時の社会科では様々な地域の歴史や気候、生活様式について学び、富山県の特徴的な気候や暮らしぶりについて理解を深めた。また音楽科では日本の民謡の中で“こきりこ節”を学び、歌詞の意味について理解を深めた(写真1)。さらに、技術家庭科の家庭分野では伝統織物である『さき織り』について学び、『こきりこ踊り』を踊る際に、より大きく表現するためのアイテムをさき織りの知識を使った。

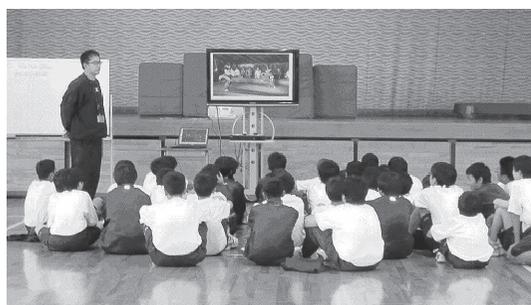


写真1 『こきりこ踊り』を鑑賞

第1・2次では、最初にオリエンテーションで本単元の流れと目標を示した。次に、多様な伝統文化に触れる目的で、世界の民謡の中で生徒に馴染みの深い『ジェンカ』と『マイムマイム』を紹介した。踊りだけでなく、それぞれの踊りに歴史や由来があることに着目させ、学習を深めた(写真2)。またそれぞれの踊りが、現代では様々なテンポや振付にアレンジされていることも紹介し、生徒にもグループごとに自由にアレンジをさせた。グループづくりはリーダー6名を立候補させ、残りは各々がグループを選択する方法で6グループをつくった(写真3)。それ以降、そのグループで活動を行わせた。



写真2 『マイムマイム』を踊る様子

表1 単元計画と実施内容

次	学習内容・学習活動	指導上の留意点・他教科との連携
1・2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オリエンテーション</li> <li>・他国のフォークダンスを踊る。</li> <li>・『ジェンカ(フィンランド)』『マイムマイム(イスラエル)』</li> <li>・『ジェンカ』を進化させてみよう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・歴史や由来に着目、多様な文化を理解させる。</li> <li>・フォークダンスの歴史や由来を大切に、踊りを進化させる。</li> </ul>
3・4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・『マイムマイム』を進化させてみよう。</li> <li>・日本の民謡『こきりこ節』を知る。</li> <li>・地域や由来について調べ、歌の意味を考える。</li> </ul>	<p>【1年社会】世界の諸地域</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域、歴史、歌詞の意味について理解させる。</li> </ul>
5・6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本の民謡『こきりこ踊り』を踊る。</li> <li>・踊りの特徴を捉え、手足の動きをマスターしよう。</li> <li>・手拍子でリズムをつかもう。</li> <li>・ポーズで表現をしてみよう。</li> <li>・『こきりこ踊り』を進化させるイメージをつかもう。</li> </ul>	<p>【1年音楽】日本の民謡</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・『こきりこ踊り』の特徴を捉える。</li> <li>・重心の高低差でダイナミックに踊り運動量の確保する。</li> <li>・『こきりこ踊り』のアレンジ映像で興味を持たせイメージを理解させる。</li> <li>・ゲーム形式でポーズを工夫し差恥心を少なく表現力を引き出す。</li> </ul>
7・8	<ul style="list-style-type: none"> <li>・既習の民謡を比較、それぞれの特徴を捉えよう。</li> <li>・『こきりこ踊り』を進化させてみよう。</li> <li>・歌の意味を理解し踊りをアレンジしてみよう。</li> <li>・アイテムを使用して工夫してみよう。</li> </ul>	<p>【1年家庭】布の組織</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・それぞれの民謡の歴史や由来が踊りに反映されているか気付かせる。</li> <li>・『こきりこ節』のテンポを変えたCDを準備、各班で選択(5パターン)して活用させる。</li> </ul>
<b>授業研究発表会</b>		
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中間発表をしよう。</li> <li>・発表を振り返りより楽しく踊れるように話し合おう。</li> <li>・現代版『こきりこ踊り』に進化させよう。</li> <li>・自分たちが大切に残したいことを確認して踊ってみよう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大きな動作で思い切りダイナミックに踊るように声掛けする。</li> <li>・グループ活動を中心に主体的・対話的な学習となるように働き掛ける。</li> <li>・何を残して何を廃棄させるかを考えさせる。</li> <li>・これまでの学習で得た知識を活用した活動になるようアドバイスする。</li> </ul>
9・10	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発表を振り返り、感想や改善点を話し合おう。</li> <li>・『炭鉱節』を参考に手の動きを考えよう。</li> <li>・オリジナルダンスをより楽しく踊れるように話し合おう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自主的に意見を出し合うように声掛けする。</li> <li>・『炭鉱節』の手の動きを紹介、オリジナルダンスの手の工夫に導く。</li> <li>・仲間と共に楽しく踊れるように声掛けする。</li> </ul>
11・12	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最終発表をしよう。</li> <li>・伝統文化を振り返ろう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・iPadを2班に1台を準備撮影、自分達のダンスを確認する。</li> <li>・鑑賞し合った後、互いに意見交換をする。</li> </ul>



写真3 グループのコミュニケーション活動

第3・4次では、日本の伝統文化では最古の民謡である“こきりこ節”を取り上げ、伝承の地域や由来、歌詞の意味を学習した。富山県南砺市五箇山<sup>1)</sup>にて受け継がれている「五箇山の唄と踊」は無形民俗文化財として知られており、“こきりこ節”は五穀豊穡を願う土地の人々の唄である。まず地元で踊られる『こきりこ踊り』を教師の指導のもと、生徒が全員で踊った(写真4)。



写真4 ささらを使って『こきりこ踊り』を指導の様子

第5～8次では、『こきりこ踊り』を習得するとともに、それを現代版に進化させることを行った。生徒が進化のイメージや興味が湧くように『こきりこ踊り』が若者によってアレンジされた映像を紹介、グループの創作活動がスタートした。進化の第一歩として、テンポを自分たちで考えさせた。原曲のゆっくりのテンポから、生徒が好むアップテンポのもの計6パターンを用意、生徒の興味に合わせて選択させた。踊り方については、自由に創作をさせたが、進化させていく中で、『こきりこ踊り』の何を残したいかということを生徒に問い、『こきりこ踊り』の歴史や由来を意識させながら、進化させていった。

単元の間時には教育研究発表会が開催され、授業ではここまで創作されたオリジナルの「現

代版こきりこ踊り」を発表した。

第9～12次では、ここまで歴史や由来を意識して創作した踊りから、自分達が楽しく踊れることを重視した踊りへと進化させた。“こきりこ節”を気軽に口ずさみながら、生徒が何時でも何処でも踊れるダンスを目指した(写真5)。その過程で、互いの踊りをiPadで撮影し鑑賞したり、意見交換をしたりしながら「現代版こきりこ踊り」を各グループで完成させ発表した。



写真5 「現代版こきりこ踊り」を創作する様子

### 3. 指導上の留意点

授業で重視したことは2点である。1点目は、授業では各国の伝統的な踊りを教えることが目的ではなく、歴史や由来に着目させ、多様な文化を理解させることを重視した点である。そのことによって、それぞれの動きに意味があり、一つ一つの動きを大切にすることで、それがダンスの楽しさにも繋がると思ったからである。人々の五穀豊穡への祈りの唄であることを知り、田植えや稲刈りの表現を低姿勢で下半身をゆっくり動かし踊ったり、動きはゆっくりでも大きくダイナミックに体を動かしたりする。そのことがダンスらしい動きになり、十分な運動量の確保<sup>12)</sup>にも繋がることもねらった。2点目は、生徒への動機付けを工夫した点である。男子にとってダンスは恥ずかしい、楽しくないと感じている生徒が多く、そのような生徒が踊りたいと思えるような工夫を意識し

た。具体的には、手拍子<sup>8)</sup>でリズムが合うことの楽しさを体験させたり、生徒がやってみたい動きや生徒が好きなダンスを導入で使ったりした。また、自分たちが表現したい動きや、やってみたい動きを自由に表現できるよう、ステップや手の振りや隊形などに制約を設けなかった。これが積極的にダンスを取り組む姿勢につながり、互いに意見を出す場面でも、どんな動きやアイデアにも互いに認め合う雰囲気につながると考えたからである。上記のように、ダンスや体育の目標を意識しながら単元を構成し、授業実施した。

#### 4. アンケート調査における分析と統計処理

本研究では、本実践の目指す点や成果を単元の

前後での変化を捉えるため、単元の最初（1次）と最後（12次）に、生徒のダンスや授業の取り組み状況等に関する調査を行った。具体的には、単元の初めのアンケート用紙には質問を11問、単元の終わりのアンケート用紙には質問7問を設定、回答方法は割合での4段階評価に○印を付ける方法と、生徒の経験や意見を問うために自由記述とした。データ分析には、教育評価であるノンパラメトリック検定による度数に関する検定を行った。4段階の差には適合度の検定を使用した。日本の伝統的なダンス（J）と海外の伝統的なダンス（F）や、単元の初め（I）と単元の終わり（II）の比較には、2変数間の差に比率に関する検定を行った。（ $p < .05$ ）。

#### 資料1 単元の初めのアンケート用紙

保健体育アンケート	組	番	氏名	
◎ 質問に対してあてはまる番号に○印を潰して下さい。記述の箇所はどんなことでも自由に書いて下さい。				
Q. 1. ダンスは好きですか？	① 好き	②どちらかと言えば好き	③どちらかと言えば嫌い	④嫌い
Q. 2. 1で①、②と答えた人に質問です。それはなぜですか？またどんなダンスが好きですか？				
Q. 3. 1で③、④と答えた人に質問です。それはなぜですか？またどんなダンスなら踊ってみたいですか？				
Q. 4. 日本の伝統的ダンス（民謡）はどのようなものを思い浮かべますか？				
Q. 5. それを踊ってみたいと思いますか？	① 踊ってみたい	②どちらかというと踊ってみたい	③どちらかというと踊りたくない	④踊りたくない
Q. 6. そのダンスについて歴史や由来について知っていますか？	① 知っている	②だいたい知っている	③あまり知らない	④知らない
Q. 7. 日本の伝統的なダンス（民謡）をこれからも残していくべきだと思いますか？	① 思う	②どちらかと言えばそう思う	③あまりそうは思わない	④思わない
Q. 8. 海外の伝統的なダンス（フォークダンス）はどのようなものを思い浮かべますか？				
Q. 9. それを踊ってみたいと思いますか？	① 思う	②どちらかと言えばそう思う	③あまりそうは思わない	④思わない
Q. 10. そのダンスについて歴史や由来について知っていますか？	① 知っている	②だいたい知っている	③あまり知らない	④知らない
Q. 11. 海外の伝統的なダンス（フォークダンス）をこれからも残していくべきだと思いますか？	① 思う	②どちらかと言えばそう思う	③あまりそうは思わない	④思わない

## 資料2 単元の終わりのアンケート用紙 (II)

保健体育アンケート	組	番	氏名
◎ 質問に対してあてはまる番号に○印を潰して下さい。記述の箇所はどんなことでも自由に書いて下さい。			
Q. 1. ダンスは好きですか？			
① 好き	② どちらかと言えば好き	③ どちらかと言えば嫌い	④ 嫌い
Q. 2. 1で①、②と答えた人に質問です。それは今回の授業が影響していますか？ している場合、どんなことが影響していますか？			
Q. 3. 1で③、④と答えた人に質問です。それは今回の授業が影響していますか？ している場合、どんなことが影響していますか？			
Q. 4. 日本の伝統的ダンス（こきりこ節）を行うことで、日本の伝統や文化の良さについて理解することができましたか？			
① 出来た	② どちらかと言えば出来た	③ どちらかと言えば出来なかった	④ 出来なかった
Q. 5. 他国の伝統的ダンス（ジェンカ、マイムマイム）を行うことで、多様な文化の違いや良さを理解することができましたか？			
① 出来た	② どちらかと言えば出来た	③ どちらかと言えば出来なかった	④ 出来なかった
Q. 6. 伝統的なダンス（民謡）をこれからも残していくべきだと思いますか？			
① 思う	② どちらかと言えばそう思う	③ あまりそうは思わない	④ 思わない
Q. 7. こきりこ節をこれからも残す為に、「現代版こきりこ踊り」を創る際に主体的に取り組むことができましたか？			
① 出来た	② どちらかと言えば出来た	③ どちらかと言えば出来なかった	④ 出来なかった
Q. 8. 授業の感想を書いて下さい。			

## III. 結果

## 1. 単元の初めと単元の終わりのダンスに対する調査

表2は、単元の初め (I) と単元の終わり (II) のダンスが好きであるかの質問の結果である。(I) の場合、〔①好き〕と答えたのは8名、〔②どちらかと言えば好き〕が23名、〔③どちらかと言えば嫌い〕は35名、〔④嫌い〕と答えたのは10名であり、これらの4段階の度数には有意な差が認められた。〔①好き ②どちらかと言えば好き〕を「好きである」の群に、〔③どちらかと言えば嫌い ④嫌い〕を「嫌いである」の群に、「好きである」の31名(40.8%)と「嫌いである」の45名(59.2%)との比率の差には有意性は見られなかった。(II) では、〔①好き〕が19名、〔②どちらかと言えば好き〕が42名、〔③どちらかと言えば嫌い〕が13名、〔④嫌い〕が2名となり、度数に有意性が認められた。「好きである」の61名(83.3%)と「嫌いである」の15名(19.7%)

の比率の差には有意性が認められた。ダンス授業にとり組んだ成果として、ダンスが「好きである」と回答した人数を比較、(I) の31名と(II) の61名では比率の有意な差が認められ、(II) での「好きである」と回答した生徒が明らかに増えたことが示された。統計量は $\chi_0^2=1420.32 > \chi$  (df = 3,  $\alpha=0.05$ ) = 3.3841459 であり有意差ありと判定する。

## 2. 単元の初めのダンスに対する意見

表3は、単元の初めにダンスが好きない理由や嫌いな理由についての自由記述である。「好きである」理由には、楽しい、面白い、カッコイイ、踊ることや音楽が好きである、運動での達成感、これまでの経験から好きになったこと等の理由が書かれた。「嫌いである」理由には、羞恥心やリズム感がない、難しい、踊る習慣がないこと等が記入された。踊ってみたいダンスには、好き嫌いか関わらず『U.S.A』の曲や『EXILE』といったアー

表2 (I) 単元の初めと(II)単元の終わりでのダンスに対する調査

授業	(I) 単元の初め				適合度	比率の差	(II) 単元の終わり				適合度	比率の差
	Q.1 区分	①好き	②どちらかと言えば	③どちらかと言えば			④嫌い	①好き	②どちらかと言えば	③どちらかと言えば		
ダンスは好きですか?		好き		嫌い			好き		嫌い			
	人数	8	23	35	10	*	19	42	13	2	*	
		「好きである」		「嫌いである」			「好きである」		「嫌いである」			
	人数	31		45			61		15			*
	%	40.8		59.2			80.3		19.7			$\chi^2=28$

(n=76, p<.05)

表3 (I) ダンスが「好きである」理由と好きなダンスと「嫌いである」理由と踊ってみたいダンス

Q.2 ダンスが「好きである」・・・Q.1で①②を選択した生徒				Q.3 ダンスが「嫌いである」・・・Q.1で③④を選択した生徒			
好きな理由	人数	踊りたいダンス	人数	嫌いな理由	人数	踊ってみたいダンス	人数
・楽しいから	10	・U.S.A	2	・恥ずかしい	12	・U.S.A	3
・面白いから	3	・ブレイクダンス	2	・リズム感ないから	6	・エグザイルのダンス	1
・カッコいいから	3	・ヒップホップ	2	・難しい	4	・タンゴ	1
・音楽がすきだから	2	・リンボーダンス	1	・覚えるのが大変だから	3	・簡単なダンス	7
・見るのが見るのが好きだから	2	・マイムマイム	1	・全身を使うので疲れる	3	・キレのあるダンス	1
・踊るのが好き	1	・現代風のダンス	1	・体育ぼくなくて面白くない	3	・楽しいダンス	6
・ノリがいいから	1	・テンポが速い	6	・ダンスについて知らない	2	・テンポの速いダンス	4
・心がウキウキするから	1	・激しいダンス	5	・楽しくない	2	・テンポが遅いダンス	2
・体を動かすのが楽しい	1	・ノリのよいダンス	4	・踊るのは嫌い	2	・皆で踊るダンス	2
・踊り終わった時の達成感がすごいから	1	・キレのある	1	・自分の姿がわからない	1	・和風のもの	1
・運動会で踊って楽しかったから	1	・いろいろな動きが混ざったダンス	1	・伝統的でゆっくりした踊りが嫌い	1	・派手でないダンス	2
・小学校の時の授業が楽しかったから	1	・楽しいダンス	2	・かたがるしい	1	・どんなダンスも踊りたくない	1
		・賑やかなダンス	1	・騒がしいから	1	・意味ないので踊りたくない	1
		・表現が大きなダンス	1	・派手すぎる	1		
		・美が強調されるダンス	1	・意味ないから	2		
		・気分が自由に踊るダンス	1	・踊る習慣がないから	1		
		・激しくないもの	1	・一人で踊るのがさみしい	1		
				・面倒くさい	1		
				・女子が踊るから	1		
				・小学校で面白くなかったから	1		

テストが挙げられて、ヒップホップやブレイクダンスのジャンルが記入、テンポが速いノリのよいダンス、キレのあるダンスへの興味が示された。

### 3. 単元の初めにおける伝統的なダンスに関する調査

表4は、単元の初めにどんな伝統的なダンスを踊ってみたいのか質問した回答である。日本の伝統的なダンス(J)では36名の半数が『盆踊り』を記入、『ソーラン節』、『阿波踊り』や『よさこい』、和楽器の演奏と着物で踊る華やかなイメージが示された。海外の伝統的なダンス(F)では、『マイムマイム』、『フラダンス』や『サンバ』で、特徴にはサークル隊形で互に見合う喜びのフォークダンス、滑らかな手の動きにメッセージを持つダンス、速いテンポで活力のある伝統的なダンスが挙げられた。また『ムーンウォーク』や『タップダンス』では、ステップの技術に興味があることも書かれた。

表4 (I) 踊ってみたいダンス

Q.4 日本の伝統的なダンス(J)	人数	Q.8 海外の伝統的なダンス(F)	人数
・盆踊り	36	・マイムマイム	6
・ソーラン節	20	・ムーンウォーク	4
・阿波踊り	17	・フラダンス	3
・よさこい	6	・サンバ	2
・能	5	・ブレイクダンス	1
・日本舞踊	3	・タップダンス	1
・獅子舞	1	・タンゴ	1
・歌舞伎	1	・コサック	1
・エイサー	1	・ワルツ	1
・民族芸能	1	・コロブチカ	1

表5は、伝統的なダンスについての興味を把握する目的で質問した回答の結果である。

「Q. 踊ってみたいと思うか」の質問に対して、(J)の場合では、〔①踊ってみたい〕は9名、〔②どちらかというとも踊ってみたい〕は15名、〔③どちらかというとも踊りたくない〕は37名、〔④踊りたくない〕は15名であり、これらの4段階の度数に有意性が認められた。「踊りたい」の24名(31.6%)と「踊りたくない」の52名(68.4%)の二群を比較、比率の差には有意性が認められ

た。(F) の場合では、①が7名、②が27名、③が28名、④が14名の回答で、同様に4段階の度数に有意性が認められた。しかし「踊りたい」と答えた34名(44.7%)と「踊りたくない」と答えた42名(55.3%)の比率には、有意性は認められなかった。(J) に比べて(F) を踊りたいと答えた人数が多かった。「Q. 歴史や由来について知っているか」の認知では、(J) の場合では、〔①知っている〕は4名、〔②だいたい知っている〕は6名、〔③あまり知らない〕は24名、〔④知らない〕は42名であり、度数に有意性が認められた。「知っている」は10名(13.2%)、「知らない」は66名(86.8%)で、二群の比率に有意性が認められた。(F) の場合、「知らない」が75名(98.7%)で殆どが知らなかった。「Q. 伝統的なダンス(民

謡)を残していくべきと思うか」の伝統文化の保存や継承に繋げ活用する意義を理解する視点での質問では、(J) の場合、〔①思う〕が30名、〔②どちらかと言えばそう思う〕が32名、〔③あまりそうは思わない〕が10名、〔④思わない〕が4名で、度数に有意性が認められた。「思う」には62名(81.6%)、「思わない」には14名(18.4%)であり、比率に有意性が認められた。(F) の場合、①が23名、②が37名、③が11名、④が5名で、同様に度数に有意性が認められた。「思う」は60名(78.9%)と「思わない」は16名(21.1%)の両群を比較、比率に有意性が認められた。(J) と(F) において伝統文化の継承の必要性があると答えた生徒が多かった。

表5 (I) 単元の初めにおける伝統的なダンスに関する調査

質問	日本の伝統的なダンス (J)				適合度	比率の差	質問	海外の伝統的なダンス (F)				適合度	比率の差
0.5 踊ってみたと思いますか?	① 踊ってみた	② どちらかという	③ どちらかという	④ 踊りたくない			0.9 踊ってみたと思いますか?	① 踊ってみた	② どちらかという	③ どちらかという	④ 踊りたくない		
	人数 9	15	37	15	*			人数 7	27	28	14	*	
	「踊りたい」		「踊りたくない」				「踊りたい」		「踊りたくない」				
	人数 24		52		*		人数 34		42		*		
	%		68.4		$\chi^2=10$		%		55.3				
0.6 そのダンスについて知っていますか?	① 知っている	② だいたい	③ あまり	④ 知らない			0.10 そのダンスについて知っていますか?	① 知っている	② だいたい	③ あまり	④ 知らない		
	人数 4	6	24	42	*			人数 0	1	16	59	*	
	「知っている」		「知らない」				「知っている」		「知らない」				
	人数 10		66		*		人数 1		75		*		
	%		86.8		$\chi^2=41$		%		98.7		$\chi^2=72$		
0.7 残していくべきと思いますか?	① 思う	② どちらかと言えば	③ あまり	④ 思わない			0.11 残していくべきと思いますか?	① 思う	② どちらかと言えば	③ あまり	④ 思わない		
	人数 30	32	10	4	*			人数 23	37	11	5	*	
	「思う」		「思わない」				「思う」		「思わない」				
	人数 62		14		*		人数 60		16		*		
	%		81.6		$\chi^2=30$		%		78.9		21.1	$\chi^2=25$	

(n=76, p<.05)

#### 4. 単元の終わりでのダンスに対する意識の変化とその理由

単元の終わりでダンスに対する意識の変化があったかを図で表わした。図1は、ダンスに対する評価の変化における4段階評価の結果である。ダンスが好きである意識が上がった生徒は44名、28名には変化はなく、4名はダンスを好きである意識を下げていた。図2は、ダンスへの好きである意識が上がった44名の変化状況である。(I) では〔②どちらかと言えば好き〕と答えた8名は(II) では〔①好き〕と回答、(I) の「嫌い

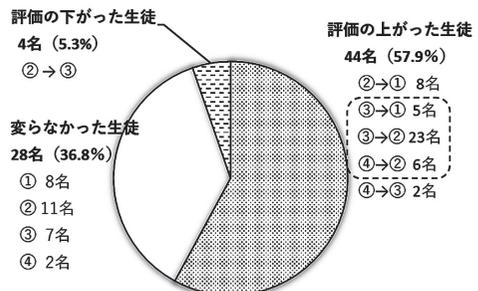


図1 ダンスへの意識の変化状況

である」の群の34名は(II)では「好きである」の群に移動する変化が見られた。

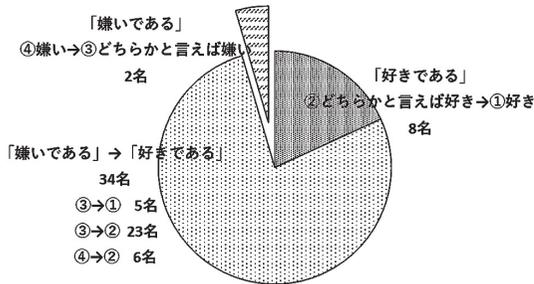


図2 ダンスの評価が上がった44名の状況

表6は、(II)でダンスを好きであると回答した理由や嫌いである理由である。「好きである」理由には、仲間と創作して楽しく踊ることができたことの内容には17名、協力してオリジナルダンスの創作したことには14名、伝統を進化させた現代版ダンスの創作の活動を10名が記入した。「嫌いである」理由には、グループでの活動が上

手くまとまらなかったことが示された。(I)に挙げられた羞恥心は書かれなかった。(I)で「好きである」と回答していたが、(II)の段階では「嫌いである」と答えた4名については、下記の理由が記入されていた。

《生徒A：世界の伝統的ダンスを学ぶのは面白い、創作活動は楽しい、踊るのが難しい》

《生徒B：得意でない、友とダンスを踊り創ることは楽しい、理解できたのも良かった》

《生徒C：もともと好き、皆と踊ると楽しい、今度は『U.S.A』を踊りたい》

《生徒D：民謡を学ぶのは楽しい、踊るのも好き、グループのリーダーの独占が嫌だった》

仲間との協調で創作やダンスを踊る楽しさや現代版と進化させた創作の面白さが記入された。

表6 (II) ダンスが「好きである」理由、「嫌いである」理由

Q.2 ダンスが「好きである」理由・・・Q.1で①②を選択	人数	Q.3 ダンスが「嫌いである」理由・・・Q.1で③④を選択	人数
・みんなで創作して楽しく踊ることができた	17	・楽しさというつまらないふざけの強要で更に嫌いになった	1
・仲間と協力してオリジナルダンスをつくることができた	14	・班が上手くまとまらなかった	3
・伝統の民謡が進化、現代版をつくるのが面白かった	10	・良さを残しながらも現代風に変えていくのが難しかった	1
・リズムに乗りいろいろなテンポでオリジナルダンスをつくるのが面白い	4	・あまり得意じゃないから	1
・ダンスの楽しさがわかった	2		
・ダンスにUSAを入れたところ	2		
・ジェンカやマイムマイムが楽しかった	2		
・自分達で考え練習し発表することが楽しい	1		
・ダンスは伝えたいことを伝えられるから	1		
・体を動かしているうちに恥ずかしくなくなった。	1		

### 5. 授業で取り上げた伝統的なダンスに関する理解

表7は、単元の終わりで「Q. 伝統文化やその良さについて理解が出来たか」の質問の結果である。(J)では、〔①出来た〕は28名、〔②どちらかと言えば出来た〕は41名、〔③どちらかと言えば出来なかった〕には6名、〔④出来なかつ

た〕が1名で、度数には有意差が認められ、「出来た」の群の69名(90.8%)と「出来なかった」の群の7名(9.2%)には比率の有意差が認められ、「出来た」と答えた生徒が明らかに多かった。(F)では、①は44名、②は29名、③は2名、④は1名で、度数には有意差が認められ、「出来た」と答えた生徒は73名(96.1%)で顕著に多くなった。

表7 (II) 伝統的なダンスに関する理解

質問	日本の伝統的なダンス (J)				適合度	比率の差	質問	海外の伝統的なダンス (F)				適合度	比率の差
Q.4 伝統や文化の良さを理解することが出来たか?	区分	①出来た	②どちらかと言えば出来た	③どちらかと言えば出来なかった	④出来なかった		Q.5 伝統や文化の良さを理解することが出来たか?	区分	①出来た	②どちらかと言えば出来た	③どちらかと言えば出来なかった	④出来なかった	
	人数	28	41	6	1	*		人数	44	29	2	1	*
	人数	「出来た」		「出来なかった」				人数	「出来た」		「出来なかった」		
	人数	69		7		*		人数	73		3		*
	%	90.8		9.2		$\chi^2=51$		%	96.1		3.9		$\chi^2=64$

(n=76, p<.05)

## 6. 伝統的なダンスの主體的な学び

表8は、単元での学びで重視した伝統への理解や活用の取り組みに対する質問の結果である。「Q. 伝統を残していくべきだと思うか」には、〔①思う〕が50名、〔②どちらかと言えば思う〕が20名、〔③あまり思わない〕が4名、〔④思わない〕が2名、「思う」と答えた生徒は70名(92.1%)で増加した。

授業で取り上げた“こきりこ踊り”を理解して「現代版こきりこ踊り」のグループ創作活動に「Q. 主體的に取り組むことが出来たか」の質問では、〔①出来た〕が41名、〔②どちらかと言えば出来た〕が25名、「出来た」と主體的に取り組んだことに66名(86.8%)が回答しており有意性を示し高い結果を示した。

表8 (Ⅱ) 伝統的な踊りに対する意識の変化や学びへの態度

質問	伝統的な踊りの取り組み				適合度	比率の差
	区分	①思う	②どちらかと言えば思う	③あまり思わない		
0.6 伝統的な踊りを残していくべきだと思いますか？	人数	50	20	4	2	*
		「思う」		「思わない」		
		70		6		*
	%	92.1		7.9		$\chi^2=54$
0.7 「現代版こきりこ」の創作に主體的に取り組むことが出来ましたか？	区分	①出来た	②どちらかと言えば出来た	③どちらかと言えば出来なかった	④出来なかった	
	人数	41	25	9	1	*
		「出来た」		「出来なかった」		
	%	86.8		13.2		$\chi^2=42$

(n=76, p<.05)

## IV. 考察

### 1. ダンスに関する意識の変化

単元の初めと単元の終わりで、ダンスに関する意識の変化を調べ、学習の成果として考察する。まず、ダンスが「好きである」と答えた生徒が(Ⅰ)での31名(40.8%)から(Ⅱ)での61名(80.3%)に増加したことは、生徒の興味に沿った工夫があり、非常に大きな成果と思われる。(Ⅰ)での好きな理由は、楽しい、面白い、踊ることが好きといった主観的な内容が述べられていたが、(Ⅱ)では仲間との協調や達成感<sup>13)</sup>が書かれ、新たな視点でダンスの楽しさの発見が書かれてあった。特に、仲間と協調した思考や考察し合っただんすの楽しさの価値を見つけ、伝統をベースに「現代版こきりこ踊り」に進化させる創作や活動が示された。授業で重視した“こきりこ節”の意味を理解しながら、田植えや稲刈りの低い姿勢の動きや、踊ってみたいステップを組み合わせて自由の踊る楽しさを発見できた学習過程は、伝統文化を学習する観点から、ダンス教育や体育科の目標に沿った授業であったと思われる。

踊ることは、リズムに乗り身体の表現である。日常行動の歩きや走る動作にはリズムがあるバ

イオメカニクス<sup>2)</sup>の観点から、ダンスにおける身体表現はその延長にあると考えている。日常動作のリズム感覚は身体に備わっているために、創作で取り入れた労働の非日常的な動作や慣れない動作を繰り返して練習した生徒は、各自のリズム感覚で自由に楽しむことで心身的に力の抜けた効率のよい動きとなり、創作のダンスをダイナミックに踊ることで運動量<sup>12)</sup>を確保でき、「好きである」と回答できたのではと推測する。ダンスが「嫌いである」と回答した理由には、(Ⅰ)での羞恥心は(Ⅱ)の段階では記入されていない。単元の初めにゲーム形式で動きを真似るといった教師自らの働き掛けにより、身心ともに解れて羞恥心を無くす有効な手立てとなったと思われる。踊ることが難しい、習慣がない事項には、幼児期からのリズム遊び<sup>11)</sup>による縦断的な教育過程が重要であり、これまでの経験が大きく影響することが示された。実践による学習活動でダンスの良さを理解できたことは利点として捉えるも創作活動が難しかったことが書かれている。創作することの難しさもあるが、グループ活動による話し合いに苦慮したと思われる。授業の参観をした状況から、グループの活発な話し合いが行われていた様子を

見るも、グループ内では互いに表現したい動きを主張したことが推測される。各自が意見を持ち授業に参加することは非常に評価すべき点であり、問題解決する力を培う上で大切な機会であったと考える。文字化は、生徒が振り返り教師が生徒の状況把握するに有効な手立てとなる。「好きである」ことや「嫌いである」理由を自分の言葉で伝えられる点は、日頃の指導の積み重ねであり、次に問題解決の方向性が見えると示唆される。

本授業は、体育館にはモニター設置によりパワーポイントでの指導、動画によるダンスや唄の紹介などにより授業を分かり易くできる環境が準備された。またグループの創作にiPadが活用され、発表会や鑑賞会はこきりこ節を聞きながら伝承への思いを高める機会となり、「現代版こきりこ踊り」によってダンスへの興味が高まる働き掛けで意識の向上に貢献されたと思われる。

## 2. 伝統的なダンスに対する認識に対する変化

伝統で踊ってみたい演目には、(J)の場合は『盆踊り』が多く書かれており地域に根差した文化として継承されていることが示された。盆踊りの行事は、先祖を供養するお盆に日本各地で開催され踊り継がれている。また日本三大祭りのひとつ『阿波踊り』が盆踊りとして有名であることや、『ソーラン節』が運動会の親子ダンスとして取り入れられていること、『よさこい』はYOSAKOIソーラン祭りとして華やかに地域のイベントへの参加や見る機会があることによると思われる。いずれの曲も軽快なテンポでノリのよい曲調が生徒には好感度が高く受け入れられたと推測する。『能』が挙げられ、日本の伝統芸能である能楽が石川県で盛んであることから、小学校での学習の経緯があるためと思われる。『マイムマイム』はこれまでの学習で喜びを表現するダンスとして楽しかった経験からと思われる。

(I)の段階では、伝統的な踊りに関しての興味は、(J)の場合に「踊りたい」との回答は24名(31.6%)、(F)は34名(44.7%)を示し、海外の伝統的なダンスへの興味が高かった。認知に関して、(J)が10名(13.2%)、(F)が1名(1.3%)

で非常に低い。継承に関しては、(J)が62名(81.6%)、(F)が60名(78.9%)で伝統の継承を必要と考える生徒が半数以上であった。伝統文化に関する興味や知識について低い結果であるが、伝統文化を継承していく必要性を考えていることが示された。海外の伝統的なダンスを踊りたいとの回答が多いのは、メディアにより軽快なリズムや華やかなダンスに関する海外情報を得る機会が多いためと思われる。

(II)の段階の結果、伝統文化への継承は、70名(92.1%)が必要であると回答しており伝統への認識や価値を高めたと推測する。ダンスに興味を持ち、今後も伝統文化遺産について学び、地域の環境を認知、理解、評価していく有効な先駆けの機会と考える。伝統文化の価値ある財産を保護・継承に繋げる意識の付けとなることを期待する。附属中の「グローバル社会に生きる」がグランドデザインとして掲げられている点で、海外への興味や継承への意識が高めることに有効であったと示唆する。本単元で伝統文化に取り組んだ意義は大きく、今後どのように価値を継承していくか考える実践研究であったと思われる。

## 3. 主体的な対話的な授業への参加

単元の終わりに主体的に取り組むことができたことに76名中66名(86.8%)が自己評価、振り返りとして書かれた意見からも問題解決に苦慮しながら主体的で対話的な学びの時間であったことが窺える。伝統に関する歴史の背景や文化を理解しながらの伝統への継承意識が高くなる学習の成果は大きい。本授業では、隣県の富山県南砺市に長きに亘り伝承された日本最古の民謡“こきりこ節”が採用されたことが興味深く、家庭科の授業で制作した『さき織り』の手拭いをアイテムとして活用する他教科連携の横断的学習の連携の実践でもあった。「現代版こきりこ踊り」は、伝統を理解する学習による自由創作、踊ってみたいステップを仲間と練習することで協調性や達成感として満足でき、ダンスを好きになる意識の変化となったと思われる。「学びに向かう力」を涵養する授業として、研究テーマである「伝統文化教育

を中心とした教科等横断的なカリキュラムを開発—グローバル社会に生きるために必要な資質・能力の育成を目指して—」に沿う総合教育の実践授業を参観できたことを報告する。

#### 4. 課題

生徒の学習への意識の向上には、いかに生徒が主体に学習に参加するかのカリキュラム・マネジメントが重要<sup>13)</sup>である。ダンス教育が主体的・対話的な深い学びとして有効なことや、言語化により生徒の現状や今後の課題が示される。振り返りの言葉から仲間とのコミュニケーションの大切さの課題が見えた。インクルーシブな特性を持つダンスゆえに発見される課題であり、示されたことは指導者にとっても大切な事項と考える。

#### V. 結論

本単元は、伝統文化が伝承されてきた背景を大切に唄や踊りを理解して「現代版こきりこ踊り」の創作活動の授業が実践された。単元の初めと終わりのアンケート調査から、生徒の意識の変容について分析、伝統文化に関する興味・関心の変化を調べることで成果や課題の点検ができた。

1. 単元の初めにダンスでは「好きである」生徒は、76名中31名(40.8%)は、単元の終わりでは61名(80.3%)に増加、その変化には有意性が認められた。
2. 単元の終わりでの伝統的なダンスの理解は、日本の場合には69名(90.8%)、海外の場合には73名(96.1%)が理解できたと回答、増加に有意性が認められた。加えて日本の伝統的なダンスについて、今後も残していくべきであると答えた人数は増加した。
3. 日本最古の唄である“こきりこ節”を取り入れ伝統文化に対する興味が深まり、歴史や背景を軸に「現代版こきりこ踊り」に進化させる創作活動は、主体的に取り組むことができたとして66名(86.8%)が回答した。

4. 振り返りから主体的・対話的な学習が具体的に示されたことや、伝統的なダンスの理解や継承していく意識の向上は、新学習指導要領における資質・能力として具体的に示され、附属中が掲げるESDをテーマに伝統文化教育の実践授業であったと示唆する。

#### 謝辞

本単元の授業計画の作成にあたっては、金沢大学附属中学校 金子真鈴教諭、金沢大学附属小学校 出嶋志津子教諭も協議に加わって頂いたことに感謝を申し上げます。

#### 参考文献

- 1) 五箇山 : gokayama.jp/jp/
- 2) Gordon E. Robertson, Graham E. Caldwell, Joseph Hamill, Gary Kamen, and Saunders N. Whittlesey, and Loarn D. Robertson, Anne Rogers and Amanda S, Ewing (2004) Research methods in biomechanics. Human Kinetics. Champaign, IL, p.1-52.
- 3) 金沢大学附属中学校(平成27年3月2日)「持続可能な社会の形成者として必要な能力や資質の育成」—教科間のつながりを目指したカリキュラム開発を通して—。平成27年研究紀要第57号。
- 4) 金沢大学附属中学校(平成28年2月19日)「持続可能な社会の形成者として必要な能力や資質の育成」—教科間のつながりを目指したカリキュラム開発を通して—。平成28年研究紀要第58号。
- 5) 金沢大学附属中学校(平成29年2月17日)「持続可能な社会の形成者として必要な能力や資質の育成」(3年次)—生涯の深い学びとカリキュラムの開発を通して—。平成29年研究紀要第59号。
- 6) 金沢大学附属中学校(平成30年2月20日)伝統文化教育を中心とした教科等横断的なカリキュラムの開発—グローバル社会に生きるために必要な資質・能力の育成を目指して—。平成30年研究紀要第60号。

- 7) 金沢大学附属中学校 (平成 30 年 11 月 21 日) 伝統文化教育を中心とした教科等横断的なカリキュラムの開発ーグローバル社会に生きるために必要な資質・能力の育成を目指してー. 第 66 回 平成 30 年度 金沢大学附属中学校 教育研究発表会資料集.
- 8) こきりこ節: [www.gokayama.jp/monogatari/kokiriko.html](http://www.gokayama.jp/monogatari/kokiriko.html)
- 9) 文部科学省: <http://www.mext.go.jp/>
- 10) 文部科学省 (平成 30 年 3 月) 中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 保健体育編. 東山書房.
- 11) 西洋子, 本山益子, 鈴木裕子, 吉川京子 (2003) 「子ども・からだ・表現」ー豊かな保育内容のための理論と演習ー. 市村出版, p.123 - 129.
- 12) 山崎正枝, 川端健司, 南谷直利, 山本博男 (2017) 下肢バランスの要素を含む伝統文化を取り入れたエアロビクス授業の事例研究ーこきりこ踊りー. 北陸体育学会紀要, 第 53 号, p.47-58.
- 13) 山崎正枝 (2020) グループワークによるエアロビクスが一人ひとりの達成感に及ぼす影響の一考察. 北陸スポーツ・体育学研究 第 1 号, p.25-35.

2020 年 11 月 13 日受付

2020 年 3 月 2 日受理